

國學院大學學術情報リポジトリ

クリスチャン・ドートルモンの初期の詩学における 言葉の物質性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): クリスチャン・ドートルモン, コブラ, 言葉の物質性, テクストとイメージ, ジャン・ポーラン キーワード (En): 作成者: 進藤, 久乃, Shindo, Hisano メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000269

クリスチャン・ドートルモンの 初期の詩学における言葉の物質性

進藤久乃

はじめに クリスチャン・ドートルモンと言葉の探究

クリスチャン・ドートルモン（1922-1979）は、二十世紀ベルギーを代表する詩人である。ベルギーのシュルレアリストらと交流した後、十八歳でパリへ発ち、ナチス占領下でシュルレアリスム活動を引き継ごうとしたグループ、「ペンを持つ手」に参加した。しかし大戦後は、亡命先から帰国したアンドレ・ブルトンらに合流することはなく、「革命的シュルレアリスム」を経て、オランダとデンマークの芸術家と共に、実験芸術集団コブラ（1948-1951）を立ち上げた。コブラ解散後も数多くの芸術家との共同作品を制作する一方、1960年代には、「ロググラム」と呼ばれる、大判の紙に筆で言葉を書いた、日本の書道を思わせる作品群を制作した。このようにドートルモンは、ベルギー——ブリュッセルとエノー——とフランスのシュルレアリスムの両方に関わり、詩と絵画を越境する詩人として注目されている。この詩人については近年多くの研究が出ており、生誕百周年を迎えた2022年を機に、雑誌に掲載された論考をまとめたものも出版されている⁽¹⁾。

ドートルモンの詩学は、ロググラムの制作や、芸術家との共同制作といった視覚芸術との関わりから論じられることが多い。「ペンを持つ手」時代にはすでに芸術家との共同制作を行っていたようだし、コブラ時代には、コルネイユ、アスガー・ヨルン、アレシンスキー、ドミンゲスといった芸術家たちと「絵・言葉」——ドートルモンが詩を手書きし、画家が絵を描く制作活動——を頻繁に行っていた。

一方ドートルモンは、常に言葉自体の力にこだわった作家でもある。占領下フランスで小冊子の形で出版された「ラブレター」（1943）では、レーモン・ルーセルを引き合いに出しつつ、「シュルレアリスム」、「ブルトン」といった語を起点とした折句的な遊戯が展開される。この作品の導入文で、ドートルモンは以下のように述べる。

言葉を徹底的に使い果たし、文字の秘密——モンゴルの小部族がアルファベットを神とするような秘密——に入り込む必要がある⁽²⁾。

ここでは、言葉とそれを構成する文字の力に対するドートルモンの思い入れを確認することができる。「ラブレター« *Lettres d'amour* »」というタイトルは、文字の可能性の飽くなき追究という意味において、「愛の文字」とも読むことができるのである。

占領下フランスの厳しい状況下、「ペンを持つ手」の若い詩人たちは、「詩や芸術活動はいかにして現実に働きかけることができるのか」と自問し続けた。主体と密接に結びついた詩が、客体である現実にどのように影響を及ぼしようのかという問題を考察する方法として、1930年代のシュルレアリスムが探究したオブジェの問題を、彼らは再び取り上げるようになった。その際もドートルモンは、オブジェの問題を言葉の問題として考えていた⁽³⁾。彼は、「言語を現実の小宇宙や雛形として」考え、「言葉の検討から事物の検討へ導く方法が実りあるように思われる⁽⁴⁾」と述べており、主体と客体の関係を変容するためには、言葉の探究が欠かせないと考えていたのである。

言葉に関する探究は第二次世界大戦後も続く。「語の現前」(1945)と題されたエッセイにある、「あなたは言葉を知っているか？あなたは言葉とともに生きている。あなたは言葉によって生きている⁽⁵⁾」といった表現からは、ドートルモンが、言葉と生を切り離せないものとして認識していることを示しているといえよう。自伝的な要素が色濃く反映された散文作品である『石と枕』(1955)でも、ドートルモンに生涯つきまとうことになる結核という病やデンマーク人女性との報われぬ愛は、言葉の問題を通じて記述される。

本論では若き日のドートルモンの言葉の探究を扱い、そこでしばしば言及される「言葉の物質性」に焦点を当てる。芸術家たちとの関わりやログラムのような詩の視覚的な側面のみならず、言葉自体の力にも注目したドートルモンの論考に注目したい。

I. ドートルモンの詩学における言葉の物質性

「言葉を徹底的に使い果たす」ことを目指すドートルモンによる言葉の探究方法のひとつは、言葉の物質性、とりわけ視覚的要素を重視することだ。ミシェル・レリスの『語彙集』のようなやり方で、ドートルモンはしばしば文字の中に事物の形——例えば白鳥« *cygne* »という単語に含まれるyの文字が白鳥の形をしていること⁽⁶⁾——を見出す。しかしそれは、クラチュロスの欲望に還元されるものではない。ドートルモンは、言葉とそれが指し示すものの必然性を夢見るのではなく、両者のずれに目を向ける。「自然の神話的保証」(1950)の「木 (*arbre*)」

という単語の定義では、「木はiである [iの形をしている] が、aがそれを開く [aで始まる]。この壊滅的な対立により、雷は木を打ち倒す⁽⁷⁾」と述べている。言葉がそれが指し示す事物の形をしていないことから詩が生み出される。

また、文字の中に事物の形を見出す以上に多いのが、反対に、風景の中に文字や書物を見出すケースである。例えば『石と枕』第八章の冒頭では、サナトリウムのあるデンマークの雪景色が書物のページへと変容する。

私は日本の景色を横切っているように感じていた。この地方にあって冬はすでにそこにあり、木々を記号へと変容していた。文字どおり、森は一冊の本、一編の詩であった⁽⁸⁾。

この一節は、後のロゴグラムを思わせるものとしてしばしば引用されるが、風景が解説すべき書物、詩、文字になることは、ドートルモンの言葉への執着を示すものといえよう。

さらに、コブラ時代のドートルモンの作品には、実際に視覚的に訴える作品も多い。「絵・言葉」では、絵は読むものに、言葉が見るものになり、両者の多様な関係が模索される。またこの時期、ドートルモンは、手書き文字にも注目している。手書きで書かれた言葉は、線のなメッセージに還元されることなく、主体の無意識的な痕跡を残し、読者の創造性を刺激するというのだ⁽⁹⁾。このような試みは1960年代にロゴグラムに結実し、文字は読者がその中を辿る体験を提供する。その他にも、セルジュ・ヴァンデルカムと共に粘土での作品を制作したり、雪に文字を書くなど、支持体やメEDIUMに対するドートルモンの関心の高さがうかがえる。

しかし、ドートルモンの作品における言葉の物質性は、文字を構成する視覚的要素やその支持体にのみ由来するものではない。上述の「ラブレター」の導入文で、「詩的マチエール⁽¹⁰⁾」は折句的な言語遊戯に関連づけられ、「私は少なくとも文字と語の存在に注意をひきたかった⁽¹¹⁾」と述べる。また、『微細なものの数学』(1946)に収録された「シンボルのシンボル」では、「そこにいるのは誰だ? — 私だ! — そこにいるのは誰だ? — 私だ⁽¹²⁾」というやり取りにおいて、「私」という指呼詞が、どんな単語にも置き換え可能であり、強調されることによるのみ意味を持つという点において、「純粋に物質的な意味⁽¹³⁾」しか持たないという。さらに、フランドル地方のフランス語話者が、オランダ語で「冬の助け」を意味する« Winterhulp »を« Secours d'Hiver »とフランス語には訳さずフラマン語のまま使う——「そういうものだから (« parce que c'est écrit »)⁽¹⁴⁾」とドートルモンはいう——ことも、「語の純粋に物質的な価値⁽¹⁵⁾」の例として挙げられる。このように、ドートルモンにおける言葉の物質性は、言葉遊びと結びついていたり、翻訳不可能なニュアンスを纏っていたり、明確な意味が不在であっ

たりするケースでもある。そこでは、事物を忠実に指し示す道具としての言葉の役割が宙吊りにされ、言葉の自律性があらわになる。

このように、ドートルモンという言葉の物質性とは、「指し示すという役割には逆らわないが、指し示すことを担う対象には逆らう⁽¹⁶⁾」言葉の性質であり、言葉とそれが指し示すものが常に一致するわけではなく両者の関係に齟齬が生じることである。例えば「語の現前」(1945)では、「chausson」という語に、「スリッパ」と「パイ」の二つの意味があることが指摘される。両者の形状が似ていることによる、単なる同音異義語である。しかしドートルモンはそこに、「*chausson*」は自分が眠る箆筒から離れることなしに、お菓子屋の棚でリングと結びつきに行く⁽¹⁷⁾という「同時に複数の場所に現れうるという偉大なる美德⁽¹⁸⁾」を見出す。つまり言葉の力は現実の法則に抗うイメージを生み出すことができる点に注目する。さらに、「自然の神話的保証」(1950)という詩的テキストの中で、「箆筒には食欲がある。箆筒には棚にきれいなパンが必要だ⁽¹⁹⁾」と展開する。夜中にこっそり動き回る食いしん坊の箆筒のイメージは、「*chausson*」という語の多義性に裏づけられたものだ。先述の例で、文字の視覚的形象に注目させつつ、言葉がそれが指し示すものを象っていないことを指摘することから詩が始まったように、言葉の物質性もまた詩的イメージを生み出すのである。

II. 言葉を通じた社会的次元の問題の考察

このようなテーマは、第二次世界大戦中から大戦直後にかけて、主にエッセーの形で論じられる。具体的には、「生まれ出る人間」シリーズの三部作である『ひとりの人間が人間というものを語る時』(1943)、『偶然についての覚書』(1944)、『微細なものの数学』(1946)に加え、終戦直後の雑誌に掲載された論考——「言語の言語」(1945)、「語の現前」(1945)、「いくつかのコード」(1946)、「明示的なものと暗黙のもの」(1947)といったテキスト群——である。ルーセル、ポール・ヴァレリー、ジャン・ポーラン、ブリス・パランなどが言及されており、ドートルモンが言葉と文学に関する様々な論考を参考にしつつ、詩論を組み立てようとしたことが見て取れる。

ドートルモン自身、オブジェを論じた1944年のテキストの中で、「語の内と外の、本質と外観の戯れを測ることに関わる」「意味論的探究⁽²⁰⁾」に興味を惹かれておりと説明している。テキストを読む限り、ドートルモンの議論が厳密な定義における意味論に基づいているとはいいがたいが、言葉の探究が、主に言葉とそれが指し示すものの関係を通じてなされていることを示しているのであろう。また、1946年には、「意味論的パズルを、日常生活という全体からかすめ取ることが一切ないように気をつけなければならない⁽²¹⁾」とも留保している。ここには、当時この詩人が影響を受けたアンリ・ルフェーヴルの「日常生活」の概念との関わ

り⁽²²⁾が見られるのと同時に、言葉の理論的可能性を探るというよりは、あくまで現実に根ざした具体的なケースにおいて言語の問題を考察しようとするドートルモンの姿勢があらわれている。実際、「ラブレター」では、「ブルトン」、「シュルレアリスム」といった語が折句的な遊戯の対象になっており、ドートルモン自身の文学的興味が言葉を通じて考察されている。しばしばルーセルを引き合いに出すのも、「ルーセルの人生は、おそらく、例えば生と文学という二つの単語の間にある⁽²³⁾」、つまりルーセルの言葉遊びを生に深く根ざしたものと考えているからだ。

実際、上述のテキスト群において挙げられる言葉の物質性の実例——具体的な状況で使われる言葉とそれが指し示す事物のずれ——の中には、ドートルモンの人生や文学的興味に深く関わるものもある。対象の個別性と言葉の持つ一般性の問題が、飼い猫が可愛くて言葉で一般化できないため「いたずらっ子« diabolotin »」ではなく« diabolton »と呼ぶ⁽²⁴⁾、という個人的レベルの問題に結びつくケースもあれば、直近の戦争である第二次世界大戦やその後の世界に関わる社会的次元の問題に向かうこともある。

今日の小説はもはや小説ではない。今日の詩はほとんど詩的でない。今日の戦争は、もはや戦争ではない。（「これはもはや戦争ではない」と国民は言ったものだが、彼らはしまいにはもはや国民ではないということになるだろう）。時代を特徴づけているのは、おそらく、ジャンルの混同である⁽²⁵⁾。

また、『微細なものの数学』（1946）でも、「フランス」という言葉が問題となっている。

「フランスはしかし…」とこの政治家は言い、「フランスがもし…」と別の政治家が言ったものだ。しかし、すでにそれはフランスではなかった。唯一大事なのは、彼らの心になかったフランス、彼らのケツになかったフランス、靴底にくっつけて持ち去ることのないフランス、「永遠の」フランスなのだ（移行させるのは1946年を超えた今、あらゆる年月を超えたのと同様に簡単だ）⁽²⁶⁾。

「靴底にくっつけて持ち去ることのないフランス（« la France qu'on n'emporte pas à la semelle de ses souliers »）」という表現は、革命期の人物、ジョルジュ・ダントンの「祖国を靴底にくっつけて逃げることはできない（« on n'emporte pas la patrie à la semelle de ses souliers »）」という台詞を下敷きにしている。ここでは、祖国という意味で使われる「フランス」という語が指すものの不安定さに焦点が当たる。いわゆる「奇妙な戦争」を経て、フランスはナチスドイツに

占領されてその存続が危ぶまれ、ヴィシー政権という特殊な体制を経て、ようやく1944年に解放された。この時期、レジスタンスと対独協力派の両陣営から多様な言説が飛び交った。解放直後から始まった粛清の際も同様である。「戦争」、「国民」、「フランス」という語が指すものが、非常に問題を孕むものであったことは想像に難くない。大戦中から終戦直後にかけて、パリとブリュッセルをたびたび行き来していたドートルモンにとっても、このような言葉が日々の生活に重くのしかかっていたといっている。

また、「いくつかのコード」(1945)と題されたテキストでは、「自由」という言葉が俎上に載せられる。この語もまた、レジスタンス詩の記念碑的作品であるポール・エリュアールの「自由」(1942)を挙げるまでもなく、占領下において重要な意味を持った語のひとつであろう。

言葉は全て同じ意味を持たない。例えば「藁葺屋根の家」« chaumière »と「イネ科の植物」« graminée »、「ハチミツ」« miel »と「ジャム」« confiture »、「詩」« poésie »と「音楽」« musique »、「自由」« liberté »と「自由」« liberté »、というように。

しかしコードのあるテキストの中では、「graminée」という語は« chaumière »のことを語るし、「miel」という語は« poésie »について語る⁽²⁷⁾。

当然違和感を与えるのは、同じ意味を持たない言葉として、「自由」と「自由」が挙げられていることだ。同じ語によって指示されているにもかかわらず別のものを指し示すという、トートロジーを反転させたケースである。確かに、同じ「自由」を論じながらその意味するところが人や状況により異なることはよくあることだ⁽²⁸⁾。しかし注目すべきは、ドートルモンがこの現象を、政治的議論でも哲学的議論でもなく、言葉に関する議論の枠内で扱っていることだ。コードという考え自体は、占領下に流通した、暗号的な要素を持つ「密輸のテキスト」を思わせなくもない。

しかし、このテキストでは、先述の引用でメトニミー (« graminée »と« chaumière »)とメタファー (« miel »と« poésie »)が示唆される以外、それがどのようなコードなのかは語られることがない。「いくつかのコード」というテキスト自体が、その読解にコードが必要なのではないかと思わせる程に曖昧さを孕んでおり、テキストの読解を線的なメッセージに還元させない不安定なものにしている。さらに、「AはAではない」という現象をコードに帰する考え方は、突飛な飛躍を見せる。1949年8月にブリュッセルで開かれた「時代を通じたオブジェ展」にドートルモンが寄せた詩では、現実には根差した固有名詞が、言葉遊びを多用したテキストの中に嵌め込まれている。

なぜなら、もし北大西洋条約が
 条約であれば
 トルーマンは素敵な赤毛の女性であろうし
 もし西側の民主主義が
 民主主義であれば
 スパークは一輪のバラであろう⁽²⁹⁾

この部分では、北大西洋条約が条約ではなく、西側の民主主義は民主主義ではないことが暗に示される。赤毛の女性やバラに変容するのは、当時のアメリカ合衆国大統領であるトルーマン、ベルギー首相のスパークである。このような表現が、「お前が真面目に働くなんて、電でも降るのではないか」といった物言いと同様のものであるといえればそれまでであろう。しかし、「条約」や「民主主義」といった語とそれが指し示すものの乖離があまりに大きいので、そんなことがあるとすれば、グロテスクな政治的人物が、「素敵な女性」や「バラ」へと変容してもおかしくないというのだ。

ドートルモンに同時代の言説の欺瞞を批判する意図があるのは明らかだ。しかし、このような社会的事象は、あくまで言葉の探究の枠内で考察されている。言葉の物質性——言葉とそれが指し示すものの関係にずれが生じること——は、詩を生み出すエネルギーとなる。

Ⅲ. ジャン・ポーランとの関わり——言葉の問題として考える戦争と戦後

このように、政治的・社会的な語を言葉の探究の中で扱うドートルモンの方法について、ジャン・ポーランを補助線として考察したい。いうまでもなくポーランは、二十世紀フランスを代表する批評家のひとりである。文学雑誌、『新フランス批評』(NRF)の編集長を長く務め、多くの文学・美術批評を執筆した。占領下フランスではレジスタンス活動に従事したが、フランス解放後の対独協力派に対する粛清には反対した。

大戦後のポーランは、『麦藁と麦粒』(1948)を通じて、「粛清の問題を、道徳的な善／悪の観点からも、政治的な公正／不正の観点からも切り離し、それを語る言葉遣いの適切さ／不適切さの観点から⁽³⁰⁾」論じた。社会的次元の問題を文学・言葉の探究として扱う『麦藁と麦粒』におけるこの姿勢は、ドートルモンの態度と比較しうるものだろう。ドートルモンのテキストには、『海賊ジャコブ・カウ』(1921)や『タルブの花』(1941)に触れている箇所がある⁽³¹⁾ものの、詩人がポーランの著作をどの程度丁寧に読み、言葉の探究に結びつけていたかは明確ではない。しかし、1950年代のドートルモンとポーランとの往復書簡⁽³²⁾では、ポーランはドートルモンの『ひとり人間が人間というものを語る時』に興味を寄せて

おり、両者の言葉の探究にはある程度共通するものがあるといえよう。

『タルブの花』の中で、ポーランはしばしば政治・社会的な議論の場における言説に依拠する。繰り返し例に出されるのは、「イデオロギーの戦争」、「裏切り者」、「輿論」、「民主主義」といった「抽象的な用語⁽³³⁾」が、その意味が明確でないままに、人間の精神に影響を与えることに対する批判的な言説である。「権利の平等という文句」や「国連という空ろな言葉⁽³⁴⁾」が批判されるのは、「ある種の言葉が——そしておそらくはすべての言葉が——意味を抜きにして人間の精神や心に独特な力を及ぼすことがある⁽³⁵⁾」という考えに基づくものである。そのような考えが、物質的な言葉と純粹で抽象的な思考を二分した上で、後者を前者の上に置く「恐怖政治」の根底にあるという。

一方ポーランが『麦藁と麦粒』の中で、肅清を進める側の「フランス」という語の使い方を問題にする際に批判の対象とするのは、思考と言葉を二分したテロリスト（「恐怖政治」の担い手）と同様に、「精神のフランス」と「肉体のフランス」に分け、前者を重視する態度であると門間は指摘する⁽³⁶⁾。ポーランはその難しさを承知の上で、両者が切り離せないものとして現れる「真の祖国」を目指すというのだ。

先述のとおり、ドートルモンもまた、「戦争」、「自由」、「フランス」、「民主主義」といった言葉を半ば批判的な形で取り上げていた。「いくつかのコード」における「自由」という語は、その意味の曖昧さが指摘されており、『微細なものの数学』においては、「永遠のフランス」が皮肉まじりに語られる。しかしドートルモンは、自由の意味を明確にすることにより真の自由を目指すわけでもなければ、言葉と思考、「精神のフランス」と「肉体のフランス」を二分することへのポーランの批判を共有しているわけでもない。少なくとも言葉の探究のテキスト⁽³⁷⁾では、ドートルモン自らを取り巻く同時代の問題を言語の問題として考え、言説に矛盾として現れる言葉の物質性を浮き彫りにするのみである。

IV. 言葉の物質的価値と記号的価値の間

それでは、このような言葉の物質的な価値をドートルモンはどのように利用するのか。これまで挙げてきた言葉に関するドートルモンの探究には、ダントンの台詞の例に見られるように、諺を使ったものがしばしば見られる。

彼は駅に入り、切符を取って、それを検札官に見せ、ホームに着いて壺（« cruche »）に乗った。ここで「壺」（« cruche »）は「電車」と同義語である。

しかし、「壺」は介入してくる。言葉をあまりに口にすると、それは死んでしまい表現されなくなる…⁽³⁸⁾。

電車という意味において« cruche »を使ったとしても、この語はひとつの諺を導く。「Tant va la cruche à l'eau qu'à la fin elle se casse」（壺を泉に繰り返し持っていくとついには割れてしまう）は、「絶えず危険に身をさらせばいつかは身を滅ぼす」ことを説く諺である。この諺は、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』（1924）の冒頭で使った表現——「現実的生活なるものへの信頼がこうじてゆくと、最後には、その信頼は失われてしまう⁽³⁹⁾」——として有名だ。ブルトンは、地に足をつけて生きることを説く諺を使いながら、そういった慎ましい人たちが当てにしている現実世界なるものの脆さを指摘したのである。この諺を、ドートルモンはあらためて取り上げる。よく使われる語が流行が過ぎ去って口にされなくなってしまうという現象が、諺という使い古された言い回しによって表現されており、解釈が宙吊りにされている。

そもそもシュルレアリストらは、諺などの紋切り型をあえて使った上で、逆転させることが多い。ブルトンとエリュアールの「ポエジーに関する覚書」（1929）は、イジドール・デュカスの『ポエジー』に倣い、ポール・ヴァレリーのテキストを書き換えたものだ。しかしドートルモンの諺の使い方は、元の意味を無効にするというよりも、読者を戸惑わせるものだ。『シュルレアリスム宣言』冒頭の文章が元の諺の転覆であったのに対し、ドートルモンのケースは、安定した解釈に還元されることを拒んでいる。

また、『微細なものの数学』に収録された「メタファーの貧困」（« Misère de la métaphore »）は、ブルトンの「詩の貧困」（« Misère de la poésie »）（1932）を下敷きにしたものだ。この短いエッセーの中には、「メタファー練習」と「宗教に奉仕するメタファー」という二つのサブタイトルがある。レーモン・クノーの『文体練習』（1947）⁽⁴⁰⁾とシュルレアリスムの二番目の機関誌である『革命に奉仕するシュルレアリスム』（1930-33）のもじりである。このテキストは、対象を「飾ったり切り取ったりして双子に見えるようにし」、「二つの対象の間に主人と奴隷の関係を取り結ぶ⁽⁴¹⁾」メタファーを批判的に論じつつ、「世界が《永遠の繰り返し》であることを理解させる⁽⁴²⁾」可能性も見出す。その実例が、『文体練習』ならぬ「メタファー練習」である。

B…の本はオレンジである。そこから何かを得るためには絞らなければならない。

しかし私はオレンジの皮が好きである⁽⁴³⁾。

「メタファー練習」の各文の構成にはある程度一貫性があり、メタファーの実例を出した上で、その不十分さから出発した一言が付け加えられている。メタファーの前提となり、本来なら無理やり切り落とされる二つの事物の間にある齟齬が、考察を深めるきっかけとなっている。さらに、「メタファーは不誠実な思

考の松葉杖だ⁽⁴⁴⁾」とも述べており、メタファーを論じるテキスト自体がメタファーとなっており、読者に「メタファー練習」を出発点とした同様の考察を促しているかのようだ。

実際、紋切り型を使いつつ、その意味を宙吊りにするようなやり方は、読者の存在を意識したものであろう。ドートルモンは言葉について語る際、しばしば紙幣や貨幣の例を出し、流通の必要性を強調する。

紙幣のような言葉が存在する。つまりそのオブジェの価値が記号の価値に優先されたのだ。守銭奴は金庫の中に、わざわざ金庫を手に入れたならであるが、「通貨の記号」を溜め込んでいる。彼の喜びは、単にそれらを持っていること、それらを使うという単なる遠い可能性に由来する。多くの知識人においても同様である⁽⁴⁵⁾。

ここでは、「オブジェの価値が記号の価値に優先される」言葉が批判されている。「オブジェの価値」は言葉のフェティシズム——「言葉自体のための言葉⁽⁴⁶⁾」——であり、意味することから切り離された言葉である。例えばダダイズムの「ガジベリピンバ」のようなものが想定されていると思われる。ドートルモンが、言葉が「指し示すという役割には逆らわないが、指し示すことを担う対象には逆らう」(注16参照)ものと捉えていたことを思い出そう。言葉の物質的な価値を重視するドートルモンの態度は、言葉は流通して初めて意味を持つという考えが前提となっているのだ。そして言葉とそれが示すものの関係が混線する箇所読者を誘い込むことにより、言葉は現実を変えうるのである。

結論

本論では、戦中から戦後にかけてのドートルモンの言葉の探究の読解を通じ、言葉の物質性を考察した。コブラにおける芸術家との共同制作からロゴグラムへと至るドートルモンの詩の発展は、書かれた言葉のメディアムに重点を置くようになった過程に見える。しかし彼は、文字の視覚的要素に重点を置くことが、詩が現実介入することに繋がると単純に考えていたわけではない。この詩人がいつも、事物を意味する記号としての言葉にこだわっていたことにも目を向けるべきであろう。

ドートルモンは、言葉とそれが指し示すものの関係のずれに「言葉の物質性」を見出す。そしてそれは、詩的な発想のきっかけや現実と言葉の結節点となる。ドートルモンは、「言語の言語」の中で次のように述べる。

古典的な詩句は思考を言葉のように明確にする。思考を局限化しながら。

我々は時おり思考がほやけたものであることを望む。愛はほやけたものだ。人生も⁽⁴⁷⁾。

ドートルモンDotremontのこのような態度は、やはりポーランPoelainのいうテロリストらのそれとは程遠い。言葉の指し示す意味を明確にしないと気が済まないテロリストらとは反対に、ドートルモンDotremontは、言葉の意味するものが揺れ動くことを望む。「語を熱いうちに捕まえ、辞書の頁の間で潰さないようにする⁽⁴⁸⁾」必要があるのだ。

そのためにドートルモンDotremontは、言葉とそれが指し示すものとの齟齬そごを助長しようとする。時には諺や紋切り型を組み替えつつ、ずれの中に読者を引き込もうとするのだ。その齟齬そごにこそ、詩が生まれ、別の現実が顔を出す余地がある。ドートルモンDotremontの詩学の根底には、言葉の頑固さや気まぐれを明るみに出しつつ、生き物のような言葉を通じて自らにとって重要な問題を考えようとする姿勢があるといえよう。

- (1) ドートルモンDotremontが雑誌などに発表した詩論、芸術論などはこれまで入手困難なものも多かったが、2022年に以下の書籍にまとめて刊行された。Christian Dotremont, *Dépassons l'anti-art*, édition établie et présentée par Stéphane Massonet, L'Atelier contemporain, 2022.
- (2) Dotremont, « Lettres d'amour » (1943), *La Main à plume : Anthologie du surréalisme sous l'Occupation*, établie par Anne Verney et Richard Walter, Syllepse, 2008, p. 199.
- (3) ドートルモンDotremontによるシュルレアリスム・オブジェの探究が言葉の探究に結びついている点に関しては、拙論「クリスチャン・ドートルモンと「時代を通じたオブジェ」展——シュルレアリスム・オブジェの一形態」(『國學院雑誌』第124巻第11号、2023年11月、93-107頁)で論じた。
- (4) Dotremont, « Vie de l'objet » (1944), dans *La Main à plume : Anthologie du surréalisme sous l'Occupation*, op.cit., p. 245. このテキストは、「ペンを持つ手」グループの機関誌『オブジェ』——ただし、機関誌は検閲を避けるために毎号タイトルを変えており、実質的にはオブジェ特集号である——に収録予定だったが、この雑誌は発行されることはなかった。
- (5) Dotremont, « Présentation du mot », *Le Ciel bleu*, n° 2, 1^{er} mars 1945, repris dans *Dépassons l'anti-art*, édition établie et présentée par Stéphane Massonet, L'Atelier contemporain, p. 129.
- (6) *Ibid.*, p. 130.
- (7) Dotremont, « Les garanties mythologiques de la nature » (1950), *Cobra*, n° 5, 1950, *Œuvres poétiques complètes*, édition établie et annotée par Michel Sicard, Mercure de France, 1998, p. 197.
- (8) Dotremont, *La Pierre et l'oreiller*, Gallimard, 1955, p. 129.
- (9) ドートルモンDotremontの手書き文字と「絵・言葉」については、以下の拙論で論じた。「コブラ時代におけるクリスチャン・ドートルモンDotremontの手書き文字——言葉の「茂み」の中を生きる」、進藤久乃編『戦後フランスの前衛たち——言葉とイメージの実験史』、水声社、2023年、69-94頁。
- (10) Dotremont, « Lettres d'amour » (1943), *La Main à plume : Anthologie du surréalisme*

sous l'Occupation, op.cit., p. 199.

- (11) *Ibid.*, p. 200.
- (12) Dotremont, « Le symbole du symbole », *La mathématique du ténu*, La Boétie, 1946, p. 67. ドストエフスキーの『悪霊』の一節。
- (13) *Ibid.*, p. 67.
- (14) Dotremont, « Langage du langage », *La terre n'est pas une vallée de larmes*, Bruxelles, Éditions La Boétie, février 1945, repris dans *Dépassons l'anti-art, op.cit.*, p. 119.
- (15) *Ibid.*, p. 119.
- (16) Dotremont, « Présentation du mot », repris dans *Dépassons l'anti-art, op.cit.*, p. 130.
- (17) *Ibid.*, p. 130.
- (18) *Ibid.*, p. 130.
- (19) Dotremont, « Les garanties mythologiques de la nature », *Cobra*, n° 5, Hanovre, début 1950, repris dans *Œuvres poétiques complètes, op.cit.*, p. 197.
- (20) Dotremont, « Vie de l'objet », dans *La Main à plume : Anthologie du surréalisme sous l'Occupation, op.cit.*, p. 245.
- (21) Dotremont, « La mathématique du ténu », *La mathématique du ténu, op.cit.*, p. 9. 強調は原文による。
- (22) 以下の論文には、ドートルモンの『ひとりの人間が人間というものを語る時』(1943) が日常生活の概念との関わりにおいて論じられている箇所がある。Léa Nicolas-Teboul, « « Vers la vie quotidienne et la vie collective », Christian Dotremont et la Main à plume », *Europe*, revue littéraire mensuelle, n° 1079, mars 2019, pp. 9-20.
- (23) Dotremont, « Raymond Roussel, le poète extrême », *Le Ciel bleu*, n° 1, 22 février 1945, repris dans *Dépassons l'anti-art, op.cit.*, p. 125.
- (24) Dotremont, « Langage du langage », repris dans *Dépassons l'anti-art, op.cit.*, p. 119.
- (25) Dotremont, « Monsieur Valéry », *Pan* Collection n°3, août 1945, repris dans *Dépassons l'anti-art, op.cit.*, p. 116.
- (26) Dotremont, « La mathématique du ténu », *La mathématique du ténu, op.cit.*, p. 12.
- (27) Dotremont, « Des codes », *Les deux sœurs*, n° 1, 1946, repris dans *Dépassons l'anti-art*, p. 175. 下線による強調は執筆者による。
- (28) ドートルモンが一時ベルギー共産党と近かったことを考えれば、マルクスのいう二重の自由も喚起させる。
- (29) Dotremont, « L'objet à travers les âges » (1949), repris dans *Cobraland*, La Petite Pierre, 1998, p. 54.
- (30) 門間広明「ジャン・ポーランと対独協力作家の粛清(1)——『麦藁と麦粒』について——」、『Études françaises 早稲田フランス語フランス文学論集』, n° 25, 早稲田大学文学部フランス文学研究室、2018年3月、p. 176.
- (31) 『海賊ジャコブ・カウ』への言及は『微細なものの数学』(*La mathématique du ténu, op.cit.*) のp. 31、『タルブの花』への言及は同書p. 69に見られる。
- (32) ドートルモンからポーランへ宛てた1953年12月15日付の手紙には、ポーランがドートルモンの『ひとりの人間が人間というものを語る時』を読みたがっていること、ドートルモンが若い時に書いたものを見せるのを少しためらっていることが読み取れる。Cf. *L'Infini*, n° 55, automne 1996, p. 108.
- (33) Jean Paulhan, *Les Fleurs de Tarbes, Œuvres complètes*, III, Gallimard, 2011, p. 141 ; ポーラン『タルブの花』、野村英夫訳、モーリス・ブランショ、ジャン・ポーラン、内田樹『言語

- と文学』、書肆心水、2004年、p. 164.
- (34) Jean Paulhan, *Les Fleurs de Tarbes*, *op.cit.*, p. 142 ; ポーラン『タルブの花』、前掲書、p. 165. 強調は原文による。
- (35) Jean Paulhan, *Les Fleurs de Tarbes*, *op.cit.*, pp. 144-145 ; ポーラン『タルブの花』、前掲書、p. 170. 強調は原文による。
- (36) 門間広明「ジャン・ポーランと対独協力作家の粛清(1)——『麦藁と麦粒』について——」、*op.cit.*, p. 182-183. Jean Paulhan, *Œuvres complètes*, V, « La tache aveugle », Cercle du Livre Précieux, 1970, p. 349.
- (37) 「革命的シュルレアリスム」期のドートルモンのテキストには、同時代の状況をより直接的に語っているものもある。
- (38) Dotremont, « Langage du langage », repris dans *Dépassons l'anti-art*, *op.cit.*, p. 120. 下線による強調は執筆者による。
- (39) André Breton, *Manifeste du surréalisme* (1924), *Œuvres complètes*, I, édition établie par Marguerite Bonnet, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1988, p. 311 ; アンドレ・ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』(1924)、巖谷國士訳、岩波文庫、1992年、p. 7.
- (40) クノーの『文体練習』は、『微細なものの数学』(1946)より後の1947年に出版されたが、すでにその一部は戦時下の雑誌『メッサージュ』誌にも掲載されていた。ドートルモンは雑誌に掲載されたものを参照したのであろう。
- (41) Dotremont, « Misère de la métaphore », *La mathématique du ténu*, *op.cit.*, p. 63.
- (42) *Ibid.*, p. 63.
- (43) *Ibid.*, p. 64. ここで言及される「B」は、しばしば言及されるブルトンの可能性が高い。
- (44) *Ibid.*, p. 63.
- (45) Dotremont, « Présentation du mot », repris dans *Dépassons l'anti-art*, *op.cit.*, p. 131. 下線による強調は論文執筆者。
- (46) *Ibid.*, p. 131.
- (47) Dotremont, « Langage du langage », repris dans *Dépassons l'anti-art*, *op.cit.*, p. 119.
- (48) Dotremont, « La mathématique du ténu », *La mathématique du ténu*, *op.cit.*, p. 9.